

# 十六世紀末日本イエズス会における修道士の退会事例について

—二つのイエズス会退会者名簿をもとに—

山口昌志

はじめに

本稿は、十六世紀末に、日本のイエズス会から退会したイエズス会士について、主に二つの退会者名簿をもとに検討を加えるものである。

従来のキリシタン研究においては、禁教後にも信仰を貫いた敬虔な日本人信徒や、ヨーロッパ宣教師たちの布教方針や体制等が主要な研究課題とされ、多くの成果が出されている。他方、キリスト教に入信し、イエズス会に入会を認められるものの退会し、棄教するに至った、日本人修道士の事跡についてはほとんど検討されていない。唯一、キリスト教の御教書である『妙貞問答』を記した後、棄教し、排耶書『破提宇子』を執筆した不干ハビアン（不干齊ファビアン）についてのみ、比較的多くの研究実績があるが<sup>1)</sup>、それでも、彼の同僚であった日本人修道士の退会事例

との比較は、まったくといってよいほどなされていない状況である。

元禅僧であった不干ハビアンを含め、大多数の日本人キリシタンは、最初からキリスト教を信仰していたわけではない。ある時期にキリスト教という異文化に触れ、受容し、弾圧を含めた何らかの要因で最終的には棄教していった。日本人修道士は、キリシタンの中でも、イエズス会に入会を認められるほど熱心な信仰心を有していた者のはずだが、本稿で見ると、少なくない数の日本人修道士が自ら退会したか、退会を命じられている。彼らの動向や退会原因を解明することは、日本人にとつての異文化受容の問題を検討する上でも重要となるだろう。

また、キリシタン背教者として知られる不干ハビアンについて、彼は自らの意志で退会しているが<sup>(2)</sup>、彼の棄教動機はまだ完全に明らかにされておらず、ハビアンの動向を検討する上でも、他の日本人修道士の退会事例を確認することは不可欠である。

さらには、最盛期には三十万人とも、六十万人いたともいわれる一般の日本人キリシタンも、大半は、キリスト教を棄てたことになるが、「伴天連追放令」等、上からの命令があったにせよ、ハビアンのような自発的な背教や脱会の例も少なくなかったはずであり、彼らがなぜキリスト教を棄てるに至ったか、キリスト教のどの点を拒絶せざるを得なかったのかといった棄教の問題も、退会者の事例から、検討されるべき課題だといえよう。

本稿では、ひとまず、日本人キリシタンの棄教研究の基礎となるような、キリシタン聖職者の退会事例を、J・シュツテ編纂のイエズス会士名簿と、ポルトガルのアジュダ宮殿付属の図書館に収蔵される『アジアのイエズス会 (Jesuits in Asia)』の退会者名簿を訳出し、他の宣教師報告と併せて検討を加えることで、示したい。

なお、本稿は、イエズス会の史料を主に用いるため、年数表記については西暦で統一し、適宜、和暦を挿入するこ

ととする。

一 「日本において会を去った、または退会をさせられた者」(Jesuitas na Asia)

始めに、ポルトガルのアジュダ宮殿付属の図書館に収蔵される、『アジアのイエズス会 (Jesuitas na Asia)』のうち、イエズス会から退会した者二十五名についての記録を訳出する。一五八四年から一五九八年にかけての退会者二十五名が記載されており、重要である。

なお、『アジアのイエズス会』全編は、川崎桃太により、日本語による目録と簡単な内容紹介が行われており<sup>(3)</sup>、また、以下の一部については、すでに土井忠生が訳出しているが<sup>(4)</sup>、本稿においては、訳の見直しを行い、改めて訳出した。原本は、活字化されたものが確認できなかったため<sup>(5)</sup>、初めに写真版により翻刻した後<sup>(6)</sup>、上智大学キリシタン文庫に収蔵されるマイクロフィルムでも照合を行った。括弧書きは、訳出者が分かる範囲で追記した補足である。

日本において会を去った、または退会をさせられた者<sup>(7)</sup>

- ① 第一に会から退会させた者は、ポルトガル人修道士で、メルキオール(メルシオール)師によってインドから連れてこられたが、支那における商売のため退会を神父に申し出たため、フェルナン・メンデスという名のポルトガル人は、一五九四年に退会処分とした。

- ② 二番目の男はキヨタのシモンという日本人で、巡察使神父が豊後に新しい地区カーサを設けた際、受け入れ

られたが夜間に逃亡した。そこにあること二日か三日で、一五八四年のことである。

③ 三番目の男はペドロ・フランシスコという名で、長崎において、無益 (*inutili*) のために、同年。

④ 四番目は、ポルトガル人メルキオール・カルネイロで、まったく頭がおかしくなり、最初の修練院において、ゆるしの秘蹟を受けた<sup>8)</sup>。

⑤ 五番目はポルトガル人修道士ペロ (ペドロ)・カラスコで、無益のため。さらにまた、試問の際に癩 (レプラ) に罹患しているようであることが発覚したため。

⑥ 六番目、日本人メルキオール。伊予地方出身で、マノエルの息子。都でキリスト教 (教理学習か) 第一級に記録される。この地域の日本人退会者を圧倒し、その後、三か四ヶ月後の夜、一五八五年に、あわれにも天草において殺害され、告白できなかつた。

⑦ 修道士シモン・ゴンサルヴェス。府内コレジオに在籍していたが一五八五年に退会処分。

⑧ ポルトガル人ガスオパル・マルティニ。インドに送られ、退会処分。

⑨ 修道士ドミンゴ・フェルナンデス。ポルトガル人。

⑩ 修道士シモン。都地方の日本人。背教した。

⑪ 修道士リノ。日本人、同じく都地方出身。前期の者とともに逃亡。

⑫ 豊後出身の修道士セバスチアン。救いがたさのため退会処分。

⑬ 同じくリノという名の日本人。無益のため退会処分。

⑭ 肥前のシモン。巡察使神父によって一五九一年に退会処分。

- ⑮ 日本人ドミンゴ。会において司祭になれないため、ペドロ・ゴメス司祭によって退会処分。
- ⑯ 大村の日本人コスメ。ペドロ・ゴメス司祭によって司祭になれないため退会処分。
- ⑰ 平戸のいおだ(不明瞭)リノ。ペロ・ゴメス司祭により退会処分。無益であり、会において司祭になれないため。
- ⑱ 伊東ジュスト。会において司祭になれないため。
- ⑲ 西フランシスコ。無益のため。一五九八年。
- ⑳ レオナルド。無益のため。一五九八年。
- ㉑ 博多のヤヌス。会において司祭になれないため、一五九八年。
- ㉒ 近江国の近江ジョアン。一五九二年に背教した。
- ㉓ 豊後の高田レオン。会において司祭になる見込みがないため、一五九五年に。
- ㉔ 豊後の工藤パウロ。憂鬱の病のため一五九五年に退会を命ぜられる。
- ㉕ 上のイグナシオ。一五九二年に、病により退会を命ぜられる。

以下に、本名簿にのみ現れる人物のうち、特に日本人について簡単に触れる。なお、生年については、名簿に記載された年齢から逆算したもので、実際には、一年か二年前後する可能性がある。

⑥の伊予メルキオール(メルシオル)は、一五九二年の名簿で天草のコレジオにあって、原マルティノらとともに、「すでにラテン語学習を終えて、現在日本の文学と書記を学習中<sup>⑨</sup>」と註されている。翌一五九三年では「数年ラテン語の第一級の学習を行い、現在は日本の文学を学習している<sup>⑩</sup>」とある。一五七二年生まれで、十一歳のとき、

一五八二年に入会が認められている。シュツテは、この伊予メルキオールを、一六一五年にマラッカで司祭に叙階された伊予シスト（長崎出身）と同一視しているが<sup>⑪</sup>、右の記録からすれば明らかに別人である。西連寺育子は、海老沢有道の研究を受けて、この伊予メルキオールを、陰陽頭賀茂在昌の息子であるとした<sup>⑫</sup>。

⑫の豊後出身の修道士セバスチアンは、一五八八年の名簿によれば、一五六八年生まれ、一五八三年に十五歳で入会を認められ、誓願修士として働いていた。一五八八年時点で教理学習中であることは知られるが<sup>⑬</sup>、その他の事跡は不明である。同様にして退会処分となった⑬のリノについては、⑬の平戸出身のリノとは別にいたということは分かるが、詳細は不明である。

⑮のドミンゴは、おそらく一五六四年生まれ、肥前出身で、一五八六年に、二十二歳で入会を認められた誓願修士のことだと考えられるが、事跡は不明である。

⑯大村のコスメは、一五六五年生まれ、一五八四年に十九歳で入会し、一五八八年時点で文法聴講と教理学習を行っている。一五九三年の名簿では、「日本の文学をわずかに知る。また、レジデンシアで説教を行う<sup>⑭</sup>」とあるが、それほど優秀ではなかったか、他に問題があったのであろう。

⑰のリノはおそらく一五八八年の名簿で、肥前出身で、一五六四年生まれ、一五八六年に入会した人物と同一であろう。一五八八年時点では院長の助手のような勤めをしていることが知られる。

⑱の伊東ジュストは、天正遣欧使節の正使・伊東マンシヨの三歳下の弟で、一五七二年頃の生まれ、ヴァリニャーノが、帰国した兄とともに入会を認めた人物である。伊東マンシヨ、ジュスト兄弟の系図的考察については、宣教師たちの報告書類が錯綜しており、よく分からない点もあるが、松田毅一らの考察によって<sup>⑮</sup>、「日向老王」とされる

伊東義祐の娘の子で、父親は、一門の伊東修理亮祐青だということが明らかにされている。また、祐青の子には、マンシヨとジュストを含め、少なくとも四人の子息と一人の娘がいたことが知られており、それぞれの幼名は、虎松、女、虎千代麿、虎次良麿、虎亀麿であることが、天正三（一五七五）年に奉納された寺院銘板から判明している<sup>(16)</sup>。天正五（一五七七）年に、島津の猛攻に耐えかねた伊東一族は豊後に亡命し、父親の修理亮祐青は死亡した。兄弟は亡命先でキリシタンとして入信したと考えられるから、右の四人兄弟のうちに、マンシヨ及びジュストが含まれると見て間違いないだろう。松田毅一は、次男虎千代麿をマンシヨに、末弟虎亀麿をジュストに推定しているが、確証はない。なお、伊東氏系図により、後に伊東祐兵の長女（北城殿<sup>(17)</sup>）を娶る、伊東家重臣の勝左衛門尉祐平が兄弟のうちに含まれており、あるいは、この退会者ジュストが該当するかもしれない。

⑲ 西フランシスコは、一五七〇年生まれで、一五八八年時点では有馬セミナーオの学生であり、一五九〇年に入会が認められている。一五九二年では、天草コレジオでラテン語二級を学習しており、翌年も継続して学習している。一五九三年時点で「日本文学についてもまだ充分な知識がない」とされており<sup>(18)</sup>、能力が低かったのであろう。

⑳ のレオナルドは、日本人であろうが、事跡不詳である。

㉑ 博多のヤヌスは、一五六六年生まれ。一五八六年、二十歳で入会を認められ、一五八八年の名簿では修練院で教理学習を続けている。一五九二年に大矢野レジデンシアに在籍し、「日本語以外知らない」とされる修道士のことであらう。

㉒ 高田レオンは、一五六一年生まれ、一五八〇年に十九歳で入会し、説教と教義学習を担当する誓願修士として働き、日本語書物作製、書写を行っていた人物だと考えられる。

⑭工藤パウロは、一五五七年生まれ。一五八二年に、二十八歳という比較的遅い年齢で入会を認められ、一五八九年に千々石レジデンシアに在籍し、一五九二年の名簿では加津佐レジデンシアに移り、「日本語しか知らない」とある。パジェスの『日本切支丹宗門史』の自注によれば、後に名を改め、五島や天草の教会看坊（小者）を務めた後、一六一四年に長崎口之津において五十二歳で殉教した工藤ソテルのことであるとされ<sup>19</sup>、片岡弥吉らもその見方を引き継いでいる<sup>20</sup>。だが、一五八八年の名簿からすると、一六一四年時点で工藤パウロは五十七歳になるはずであり、殉教した工藤ソテルとは年齢が合わない。ソテルは、この工藤パウロの弟などが想定されるにせよ、別人ではないか。天正遣欧使節に同行し、一六一四年にマニラに移ったペドロ・モレホンの『日本殉教録』からも、工藤ソテルが工藤パウロと同一であったことを示す記述はなく<sup>21</sup>、パジェスが何に依って同一人物だとしたかは不明である。

なお、⑮の上のイグナシオは、「病により」退会しているが、次章の訳出史料により、癩（レプラス）を患ったペロ・カラスコのような病気とは別の問題があったと考えられる。

その他の日本人修道士については、次の訳出史料と併せて検討したい。

## 二 「九〇、九一、九二年度に日本小区修道会より退会を命ぜられた者」(MONUMENTA HISTORICA, JAPONIAE 1)

以下、J・シュツテ編纂のイエズス会士名簿から訳出を行う。

イエズス会には一五九〇年から一五九二年に日本の管区から退会を命ぜられた修道士十名の記録が残されており、日本人はうち七名である。一の名簿と重複する氏名もあるが、本名簿の記載内容の方が詳細である。本史料も、過去



に邦訳された例が確認できなかったため、今回初めて邦訳を試みるものである。

九〇、九一、九二年度に日本小区修道会より退会を命ぜられた者、死亡した者、また受け入れた者<sup>22)</sup>

〔1. 退会〕

- ① 修道士・アマドール・デ・ゴイス。インド人<sup>23)</sup>。ゴア生まれ、三十二才、会にあること一四年。一五七五年にゴアで受け入れられ、七六年に日本へ派遣された。それから初学者のまま留まり、同年代の者と比べても学習するには幼すぎた。語学はよく学んでおり、豊後において人文学、哲学を学習し、一年半の間、教理学習を積んだが、注意散漫になり、精神的にも劣り、知能も不足したため、ガスパル・コエリヨ神父により、一五八九年三月に、支那の副管区へ送られ、同年中に会から放たれた。
- ② 修道士ルイス・デ・アブレウ。インド人、コチン生まれ。三十二歳、会にあること十年。日本においては、一五八〇年に受け入れられ、豊後のコレジオでラテン語を学習し、語学を学んだ。しかし、たいへん怠惰であり、幾らか、召命が救済に適さないとする誘惑を受け、同じくガスパル・コエリヨ神父により、前者と同様、他の者とともに支那へ送られ、一五九〇年に退会させた。
- ③ 修道士・シモン。日本人。大村出身。二十八歳。会にあること八年。ガスパル・コエリヨ神父のもとで日本で一五八二年に入会許可。そして九〇年までラテン語を学習する。しかし怠惰な男であり、精神性に欠け、召命に誘惑を受け、会は同年、彼を解雇した。
- ④ 修道士・平戸のアントニオ。日本人。二十二歳。会にあること二年半。ガスパル・コエリヨ神父のもと、

一五八九年最初の日に入会許可。修練院における二年の課程を終えた後、志木レジデンシアの神父のもとに派遣される。六ヶ月後のある日、与えられた機会や許しを得ることなく外出するという、規則を破る小騒動を起こした。名説教家で、外部で（人を）募って教会へと招いたことにより、教会へ連れ戻したが、修練院で再開可能であったにもかかわらず再び修練院から逃れた。この脱走により彼を救済する術は失われた。

⑤ 修道士・三箇<sup>イルマン</sup>アントニオ。日本人。河内国三箇出身、二十二歳。会にいること三年。ガスパル・コエリヨ神父のもと、一五八八年に入会許可。未熟さといくらかの頭の病気のため、修練院に入ったが助かりの信仰<sup>ヒゴス</sup>が得られなかったため、九一年にこれを止め、進歩が見られないために退会させた。

⑥ 修道士・上<sup>イルマン</sup>のイグナシオ。都出身。三十歳、会にあること十年。一五八一年に入会許可。レジデンシアに奉仕していたが、憂鬱になり、誘惑にもかられ、幾らかの墮落からの復帰もなく、会が九一年に解雇した。

⑦ 修道士・近江<sup>イルマン</sup>ジョアン。二十七歳。日本人。近江国出身。会にあること六年。ガスパル・コエリヨ神父のもと一五八六年に入会。長年に渡って不遜であり、自己抑制が悪く、外へ出る許可（退会許可か）を求めたが、希望どおりにならず、九二年に会員の投票によらず退会させられた。

⑧ 修道士・きたパウロ。出生地は千々石。有馬のセミナリオ出身。二十一歳。ガスパル・コエリヨ神父のもと一五八九年に入会。頑固であり、自己抑制も不足していたため、日本の修練院で鍛え直そうとしたが、精霊へまいったくたどり着くことができず、助かりの信義に至る前に修練院の課程を終了させた。

⑨ 修道士・志岐<sup>イルマン</sup>メルキオール。日本人、二十三歳。同時期にガスパル・コエリヨ神父から入会。修練院へ入るが、軽率な男で、自己抑制が悪く、頭脳も低い。一五八一年（九一年の誤りか）末に離別を告げ、投票を待

つまでもなく修練院での生活を切り上げさせた。

⑩ イルマン 修道士・ペロ・コエリヨ。ポルトガル人、コンデ村<sup>24</sup>生まれ。三十四歳、会にあること十七年。ゴアにお

いて一五七五年ごろに受け入れられ、八六年に日本へ派遣された。若年で修練院にある間、アマドール・デ・ゴイスや他の学生とともに語学を学び、府内コレジオでラテン語、哲学を学び、教理学習を二年半行つた。しかしながら、注意散漫であることが明らかとなり、精神的な節制にも乏しく、危険な会話を行つていたことから、アマドール・デ・ゴイスとともに、ガスバル・コエリヨ神父によつて支那へ送られた。そこで、援助を行う上長により再証明及び教育を施して日本へ戻したが、以前よりも散漫としていたため、一五九二年一二月に退会させた。

日本人は③から⑨の七名であり、少なくとも③シモン、⑥上<sup>かみ</sup>のイグナシオ、⑦近江ジョアンが、一の名簿と重複する。また、②ルイス・デ・アブレウ、③シモン、⑥上のイグナシオ、⑧きたパウロ、⑨志木メルキオール、そして⑩ペロ・コエリヨについて、「誘惑」や「自己抑制」、「精神的な節制」が問題とされているが、「誘惑」は tentação の活用形が使用されており、これは当時のキリシタン用語「てんたさん」に対応する。「自己抑制」は、mortificado であり、同じく「もるちひかさん」で克己、苦業、節制あるいは禁欲とも訳せる。当時の日本イエズス会では規律が弛緩していたと指摘されるが<sup>25</sup>、そのことは名簿上からも窺える。

章を改めて、個別事例を検討したい。

### 三 退会者について

訳出した二つの名簿にある、退会させられた日本人修道士については、一五九〇年に天正遣欧使節を伴って帰国したヴァリニャーノの報告書に記載がある。当時、すでに七十人近くの日本人キリシタンがイエズス会への入会を認められ、修道士として布教活動に従事していたが、ヴァリニャーノは次のように、受入れを否定的に述べている。

私にはその受入れが自由に過ぎ、必要以上に早急であり、経験のない新しい人々でイエズス会の人員が増加することは有害であると思われたので、私が当地に来てからこの二年間には、ローマへ赴いた四人の侍とドン・マンシオの弟、計五名だけをイエズス会に迎え、他の五名は素質がないので（会から）去らせた<sup>(25)</sup>

日本人に対し「適応主義」を採ったとされるヴァリニャーノだが<sup>(27)</sup>、再来日した際はやや懐疑的になっており、ここでは五名を退会させたと述べている。

また、日本人修道士の退会については、一五九八年に記された、通事ロドリゲスの書翰でも言及されている。本書翰は、すでに土井忠夫による邦訳があるが、改めて該当部分を訳出すると次のようになる。

（日本人聖職者の）何人かは信仰を棄てた。例へば、リノ、シモン、近江ジョアン、アントニオがいて、彼らは単に信仰を棄てただけではなく、自分では信用を与えていないにもかかわらず、虚偽を言い広めた。また、何人

かは不信仰者の土地で結婚し、子を設けた<sup>28</sup>。

リノ、シモン、近江ジョアン、アントニオといった日本人修道士が、信仰を棄てるどころか、積極的な背教行為を働いていたという記述であり、前章までに邦訳した内容と対応する。

退会年をもとに、ヴァリニャーノが去らせた五名の特定を試みると、二・③大村出身の修道士シモン、二・⑤三箇<sup>サンガ</sup>アントニオ、二・⑥上のイグナシオ、二・⑧きたパウロ、二・⑨志木メルキオールが該当すると考えられる。

一・⑭の肥前のシモンと、二・③の大村出身の修道士シモンは明らかに同一であって、一に「巡察使神父によって退会」とあり、ヴァリニャーノによって退会させられた日本人修道士だと見て間違いあるまい。また、二の名簿に「誘惑を受け」という記述を、異教徒（日本人）との結婚だと見れば、ロドリゲス報告書にもあるシモンのことだと見ることもできよう。肥前シモンは、退会後にキリスト教を批判する側に回り、非キリシタン日本人社会に戻って行ったのであろう。一五八八年のイエズス会士名簿によれば、一五六五年生まれで、十七歳で入会を認められ、当時はラテン語を聴講し、教義学習を担当する誓願修士として働いていた。

一・⑫及び二・⑥<sup>カミ</sup>の上のイグナシオは、一五九一年に退会処分となっており、これもヴァリニャーノによる処分と見て間違いないだろう。一の名簿上では単に「病により」とあるが、二により、誘惑や墮落がより大きな原因となっていたことが窺える。一五六一年生まれ、二十歳で入会を認められ、以後は説教と教義学習を担当する誓願修士として働いていた人物である。

一の名簿に記載はないが、二・⑨の志岐メルキオールも、ヴァリニャーノによる退会処分を受けた人物であろう。

退会年が一五八一年だと記載されているが、シュツテが註しているように、名簿の題名からすれば一五九一年の誤記だと考えられる。二の「投票を待つまでもなく修練院での生活を切り上げさせた」という記述は、ヴァリニャーノが独自の権限で退会させたと解釈でき、一の名簿に記載されていない理由が納得できる。一五八八年の名簿によれば、一五七〇年生まれで、一五八三年に十三歳で有馬セミナリオに入学。ラテン語一級、音楽、日本語とも「良」とされる。平均的な成績であったといえる。

二・⑤の三箇<sup>サンガ</sup>アントニオは、単純に能力的な問題があったのであろうが、元和八（一六二二）年のいわゆる「元和の大殉教」で、妻マグダレナとともに殉教していることが知られている<sup>(29)</sup>。とすれば、ロドリゲスの言う「信仰を棄てた」アントニオは、二・④の脱走した平戸のアントニオのことであらう。二・⑤の三箇<sup>サンガ</sup>アントニオは一五七〇年生まれで、十一歳で都地区のセミナリオに入学。一五八八年時点で、ラテン語は二級、日本語は「良の上」とされる人物である。イエズス会の『会憲』には、「婚姻の絆に拘束されていることが発覚した者は、退会させる」と明確に規定されているが<sup>(30)</sup>、退会理由からは女性問題があったとは思われないため、結婚したのは退会後であらう。

二・③きたパウロについては、二の記載事項のほか、退会理由等は不明だが、自己抑制の問題があったことが指摘されている。一五八八年のセミナリオ学生名簿によれば、一五七〇年生まれで、一五八〇年、十歳でセミナリオに入学し、以降ラテン語一級、音楽の成績は「優」、日本語は「良」と評価されている。成績から見ると、比較的優秀なキリシタンだったと考えられるが、「頑固 (cabecudo)」と評価されて退会処分となった。

ロドリゲスの書翰にも現れる、一・②<sup>(22)</sup>及び二・⑦の近江ジョアンは、一の名簿で「背教 (apostata)」という強い言葉が使用されており、ヴァリニャーノが退会させた五名とは別であらう。近江ジョアンは、一五六三年生まれ、

二十三歳の時、不干ハビアンらとともに入会を認められた誓願修道士である。ハビアンとは年齢も近く、相当程度まで親しかったと考えられる<sup>①</sup>。また、天正一八（一五九〇）年の第二回イエズス会協議会に、ハビアンとともに参加を認められており、優秀な修道士であったことが窺えるため、ヴァリニャーノが「素質がない」として退会させたとは考えられない。また、ロドリゲス書翰にある背教的行為により、一・②の名簿で「背教した」と記されるのも当然であると理解される。この近江ジョアンは、少なくともハビアンと並ぶほど優秀な修道士であって、そうした人物が自らの意志で退会を求め、キリスト教信仰を批判したことは、非常に興味深い問題である。彼の退会から十六年後に生じた不干ハビアンへの影響も考慮すべきではないか。

二・④で脱走した平戸アントニオは、一五六八年生まれで、入会時は十九歳であった。二の記載内容からは、相当程度まで優秀な宣教師であったことが窺え、その有能さゆえに宣教師と反発したかして、一度脱走した後、連れ戻され、再び脱走したものであろう。なお、脱走した後、会に復帰しているのは、『イエズス会会憲』にも規定された正当な対応である。会憲の第二部第四章「自ら退会した者と退会させられた者に対して本会がとるべき態度<sup>②</sup>」には以下のように規程されている。

許可を受けずに退会した者がすぐれた人物であり、その者が強い誘惑にかられたり人から欺かれて退会したことが明らかなる場合、長上は、引き戻す措置を取る。法廷で争うことも可能である。

許可を受けずに退会した者というのは、自らの意志で脱走した者だといえるが、そうした人物であっても、有能な

人物であれば引き戻る処置が執られるというのである。平戸アントニオがある程度まですぐれた人物であったことは疑いない。

最後に、ロドリゲス書翰で背教行為を働いたとされるリノについては、情報が乏しいため断定するのは困難だが、一・⑪にある、都地方の出身者で同郷のシモンとともに逃亡した修道士リノの蓋然性が高い。一五五九年生まれで、二十一歳の時に入会を認められ、説教と教義学習を担当する誓願修士として働いていた。

### おわりに

本稿において、二つの退会者名簿を訳出し、退会した日本人聖職者の動向について、若干の検討を加えた。

解明できていない部分も多いが、日本人退会者に関する基礎的情報を示し、幾人かについては、従来推定されていた人物とは別人であることも指摘することができた。また、不干ハビアン以外にも、注目すべき日本人キリシタン（聖職者）の退会者がいたことも明らかにできたと思われる。

訳出した名簿の中では、例えば近江ジョアンの存在は重要である。不干ハビアンと同年にイエズス会に入会し、ハビアンと同じように、一五八六年のイエズス会協議会の日本側代表者として参加した優秀な修道士でありながら、自ら退会を望み、「背教」と記される行動を取った。彼の退会動機はもちろん、彼が他の日本人キリシタンに与えた影響についても、さらなる検討が必要である。また、三箇アントニオのように、最期に殉教するような敬虔な修道士が、退会させられている点も、深く考究されるべき課題であろう。最初に触れたように、不干ハビアンの棄教事例と



の比較も行う必要がある。

従来のキリシタン研究では、殉教者や特定の人物を除けば、個々の修道士、とりわけ背教していった人物について研究されることはほとんどなく、注意が払われることも少なかった。そうした人物について、未邦訳の文書類は無読のこと、これまでに訳出された多くの史料の中でも、見過ごされている記述は少なくないだろうし、伊東マンシヨの弟、ジュストのように、日本側史料でも事跡を確認できる人物もあるはずである。

日本人にとつての異文化受容という問題を検討する上でも、今後とも、日本人キリシタンの退会の問題は、さらに研究されるべき課題であると考えられる。

本研究により、十六世紀末の日本イエズス会における日本人聖職者の動向について、新たな視点が呈示できれば幸いである。

## 注

- (1) 不干ハビアンについての基礎史料としては、海老沢有道他校注「妙貞問答・排耶蘇・破提字子」(『日本思想体系二五』(岩波書店、一九七〇年)、井手勝美『キリシタン思想史研究序説』(ペリかん社、一九九五年)、チースリク「フアビアン不干伝ノート」(『キリシタン文化研究会会報』一五・三(キリシタン文化研究会、一九七二年))及び末木文美士編『妙貞問答を読む ハビアンの仏教批判』(法藏館、二〇一四年)等を挙げることができる。その他、ハビアンの生涯を通じた分析をした主な研究書としては、坂元正義『日本キリシタンの聖と俗』(名著刊行会、一九八一年)、釈徹宗『不干齋ハビアン―神も仏も棄てた宗教者』(新潮選書、二〇〇九年)、梶田淑一『不干齋ハビアンの思想』(創元社、二〇一四年)等があり、その他、仏教等の個別の思想についても多くの研究論文が発表されている。また、『天草版平家物語』をもとにした研究も多く、福島邦道『天草版平家物語叢録』(笠間書院、二〇〇三年)等、日本文学や日本語史研究においても多くの成果がある。
- (2) 井手勝美『キリシタン思想史研究序説』。

- (3) 川崎桃太「アジユタ図書館『Jesuitas na Asia』集書の研究(その一〜七)」(『Cosmica』五〇一一〈京都外国語大学、一九七六〜一九八二年〉)。
- (4) 土井忠生「シヨアン・ロドリゲス通事の日本書翰」(『日葡交通第二輯』〈東洋堂、一九四三年〉)一六八頁。
- (5) 各見出しについては詳細に活字化されている。Francisco G. Cunha Leão, coordenação "Jesuitas na Ásia : catálogo e guia." Instituto Cultural de Macau, Instituto Português do Património Arquitectónico, Biblioteca da Ajuda, 1998
- (6) 岡本良知『Jesuitas na Ásia』(郁文堂、一九三二年)。なお、文字の視認性がよいとは、キリシタン文庫のマイクロフィルムは文字がつぶれており、写真版の方が鮮明である。
- (7) 川崎の目録では「日本にて会を脱退した者について」である。(「アジユタ図書館『Jesuitas na Asia』集書の研究(その二)」(『Cosmica』六〇〈京都外国語大学、一九七七年〉)。
- (8) 元エチオピア司教に任じられた人物で、一五八一年にマカオ管区長を退任し、以後はイエズス会の家に隠退し、八三年に死去した。死去による退会という意味であろう。
- (9) JOSEF FRANZ SCHOTTE "MONUMENTA HISTORICA JAPONIAE I." Apud Monumenta historica Soc. Jesu. 1975. P.290
- (10) Ibid. P.320
- (11) Ibid. P.1197-1198
- (12) 西蓮寺育子「陰陽頭賀茂在昌のキリスト教受容をめぐる」(『キリシタン史の新発見』〈雄山閣出版、一九九六年〉)。
- (13) JOSEF FRANZ SCHOTTE "MONUMENTA HISTORICA JAPONIAE I." P.261
- (14) Ibid. P.323
- (15) 松田毅一「天正遣欧使節の真相：特に伊東満所に就いて」(『史学雑誌』七四一〇〜一九六五年)。
- (16) 浜田青陵「日向の二日旅―伊東満所が母の事とも」(『史林』二二一一〜一九三五年)。
- (17) 国書刊行会編「日向記」(『史籍雑纂』一〈国書刊行会、一九一一年〉)五三六頁。
- (18) JOSEF FRANZ SCHOTTE "MONUMENTA HISTORICA JAPONIAE I." P.319
- (19) レオン・ハジウス、吉田小五郎訳「日本切支丹宗門史(上)」(岩波書店、一九三八年)三八一〜三八二頁。
- (20) 片岡弥吉『日本キリシタン殉教史』(時事通信社、一九七九年)。
- (21) ベドゥロ・モレホン、佐久間正訳「日本殉教録」(キリシタン文化研究会、一九七四年)。
- (22) JOSEF FRANZ SCHOTTE "MONUMENTA HISTORICA JAPONIAE I." P.335-339

- (23) 他年度の名簿には、ポルトガル人だと記載されている。インド生まれのポルトガル人であろう。
- (24) ヴィラ・ド・コンデ。ポルトから二五キロほど北方にある漁村。
- (25) 例えば、高瀬弘一郎『キリシタン時代の研究』（岩波書店、一九七七年）六〇頁。
- (26) ヴァリニャーノ 松田毅一ほか訳『日本巡察記』一三二頁。
- (27) 例えば、高橋勝幸「A・ヴァリニャーノの適応主義の現代的意義」〔『アジア・キリスト教・多元性』一四（アジア・キリスト・多元性）研究会、二〇一六年〕。
- (28) 一五九八年二月二八日付の総長宛書翰。土井忠生「ジョアン・ロドリゲス通事の日本書翰」〔『日葡交通』第二輯（東洋堂、一九四三年）一五六頁。
- (29) 片岡弥吉『日本キリシタン殉教史』（時事通信社、一九七九年）二六九頁。
- (30) イエズス会日本管区編『イエズス会会憲 付会憲補足規定』（南窓社、二〇一一年）一〇五頁。
- (31) JOSEF FRANZ SCHOTTE 'MONUMENT A HISTORICA JAPONIAE I'. P.250
- (32) イエズス会日本管区編『イエズス会会憲 付会憲補足規定』（南窓社、二〇一一年）一〇八―一一頁。